

崖の上で踊る

石持浅海

最終回

第五章 敵と味方（承前）

「よくもっつ！」

血まみれの顔で、亜麻あまね音が叫んだ。「よくもっつ！ 吉崎よししきさんを

っ！」

再びナイフを振り下ろす。今度は頬ほおを切り裂さいた。すでに首から大出血を起こしている江角えすみは、まったく抵抗できない。いや、抵抗

どころか、反応すらしていない。

沙月さつきが唱えた、江角犯人説。

それは恐ろしいほどの説得力を持っていた。江角は認めていない。

しかし、ひどく狼狽ろうばいしていた。その様子は、真相を言い当てられた犯人の反応ふさわとして相応しいものだった。

だから、亜麻音は信じた。江角が犯人であると。つまり江角こそが、吉崎を殺害したのだと。亜麻音は意識を取り戻した後、一人でキッチンに入って紅茶を淹いれていた。そのとき、ナイフを取り出して隠し持っていたのだろう。犯人がわかったら、すぐさま攻撃できるように。

そして亜麻音は攻撃した。「犯人」の江角を。彼女に、吉崎のような殺人経験があるかどうかは知らない。もともと、経験があったとしても、あまり関係なかったかもしれない。江角に飛びかかった亜麻音は、まるで肉食獣にくしよくじゆうのようだった。経験でなく、本能が彼女に攻撃を命じた。そんな感じだった。

「やめるっ！」

亜麻音の背後から、雨森あめもりが体当たりした。亜麻音の上体が前に倒れる。江角の顔に胸をぶつけるような体勢で、顔を床にぶつけた。女子大生に胸を顔に押しつけられても、江角は喜ぶような意識を残していない。

亜麻音はバネ仕掛けのように起き上がった。振り向いて、突き飛ばした雨森に顔を向ける。それで、絵麻えまにも亜麻音の顔が見えた。

ぞくりとした。

亜麻音の顔が、血まみれだったからではない。亜麻音の表情は、怒りとか憎しみとか、人間が持ちうる感情を、はるかに飛び越えていた。そこにあるのは、ただ「敵を殺せ」と指令を受けたアンドロイドの顔だった。そして、指令の実行を妨害する者に対する敵意。

アンドロイドは、自分に体当たりしてきた人間を、敵と認識したらしい。ナイフを握りしめたまま、立ち上がって攻撃しようとした。雨森が身構える。しかし雨森に向かおうとした亜麻音の足が、江角の顎を踏んだ。頸椎を支点として江角の顔が回り、そのため亜麻音の足元も揺らいだ。亜麻音が大きく体勢を崩す。両腕でバランスを取ろうとしたため、ナイフが明後日の方向を向いた。

雨森はその隙を逃がさなかった。ナイフの外側から回り込み、亜麻音の顔面を右手でつかんだ。そのまま、まっすぐ後ろに押す。かなり強い力が加わっているのは、離れたところから見てもわかった。ナイフを持ち、実際に江角を刺した相手なのだ。手加減などしてられない。体重を乗せて、亜麻音を押し倒していく。

江角は、窓を背にしたキッチン側に座っていた。テーブルの端だ。亜麻音はそこまでダッシュして、江角を刺した。つまり亜麻音もまた、テーブルの端にいる。雨森はその位置で亜麻音を後ろに押した。亜麻音の頭部が後方に倒れていく。その先には、テーブルの角があった。

がつん、という音が食堂に響いた。

亜麻音が後頭部をテーブルの角にぶつけた音だ。雨森が手を放す。そのまま亜麻音は倒れ込んだ。先ほどテーブルの角に打ち付けた後頭部を、今度は床にぶつけた。もう一度鈍い音が響く。江角の身体からだに片脚を載せる恰好かっこうで、仰向けあおむに転がった。

びくん、と亜麻音の身体が震えた。白目しろめを剥むいている。身体の震えが次第に大きくなっていった。後頭部を強く打ちつけたから、痙攣けいれんを起こしたのだ。かつん、かつんと歯がぶつかる音がする。

「まづいな」

雨森が屈かがんで、痙攣する亜麻音の身体を横向きにした。額に手を当てて後ろに引き、頭部を胴体と直角にした。気道を確保したのだ。「これで、舌を噛かんだり、吐はいたものを喉のどに詰めたりしない。放っておけば、収まる」

雨森が立ち上がった。亜麻音の手から離れたナイフを蹴けと飛ばす。飛んだナイフは、壁に当たって止まった。

亜麻音の身体はまだ痙攣を続けている。しかし雨森がそう言う以上、放っておいて問題ないのだろう。少なくとも、今の亜麻音からは攻撃力が失われている。近づいても危険はない。

女性三人が、ようやく雨森の傍そばに移動できた。雨森はもう一度しやがんで、今度は横たわる江角の様子を窺うかがった。すぐに首を振る。

「ダメだ」

江角の首は、もう血を噴き出していない。噴き出しきったということなのだろう。江角の身体は静止していた。この保養所に来てから、何度も見てきた、完全なる静止。江角もまた、死者の列に加わったのだ。

雨森は立ち上がると、女性陣に顔を向けた。

「亜麻音さんの様子を見ていてくれないか」

返事を聞かずに食堂を出て行った。そうしているうちに、亜麻音の痙攣が次第に治まっていった。しかし意識は戻らない。深く眠っているように見える。

絵麻は、沙月に視線を向けた。沙月は、死んだ江角をじっと見下ろしていた。

「どう思う？」

沙月が顔を上げる。「どうって？」

「江角さんが、犯人だって話」

「ああ、それね」目の前で仲間が殺されたのを見たためか、あるいは亜麻音の狂気に触れてしまったためか、さすがの沙月も顔が青ざめている。

「話をしているうちに思いついたんだけど、実際に口にしてみると、本当にそうじゃないかと思えてきた」

「確かに、一理あるよね」千里ちさともうなずく。こちらも表情が硬い。「残念なのは、本人が白状する前に、亜麻音さんが殺しちやつたことだね」

「確かに」沙月が唇を噛んだ。「江角さんは、ずいぶん慌あわてふためいてたからね。あのままもう一押しすれば、観念してたかも。それなのに、余計なことを」

沙月が爪先つまさきで亜麻音の脚を蹴飛ばした。ごく弱い力だ。亜麻音は反応しない。

雨森が戻ってきた。手には、布製のガムテープが握られている。「紐ひもがよかったんだけど、見当たらなかったから、管理入室からガムテープを持ってきた。これで、用は足りるだろう」

独り言のようにつぶやきながら、亜麻音の足元にかがんだ。パンツの裾を上げる。むき出しになった足首を、ガムテープでぐるぐるに巻いた。次は手だ。亜麻音は右側を下にした上体で横になっている。雨森は身体の下から右手を背中に移動させた。左手も同じようにして、両手首をやはりガムテープで巻いた。亜麻音は拘束こうすうされた状態で床に転がされる形になった。

「ついでに襲たつちやえば？ 後ろを向いてあげよ」

沙月が軽口を叩く。この状況で冗談を言えるとは、たいした神経だ。

雨森が沈痛な面持ちで頭を振る。「そのネタは、もう終わった」

「あの」千里が割って入った。「座らない？」

今まで使っていたテーブルは、すぐ傍に江角の死体がある。それ以上に、血溜まりがある。自分の席からは距離があるけれど、あまり座りたくない。千里が窓の近くを指し示した。まだ四人掛けのテーブルは残っている。現在、食堂において意識があるのは四人だけだ。テーブルひとつで用が足りる。一橋が死んでいたテーブルからも、江角が死んでいるテーブルからも離れた場所に移動した。

先ほどは、長テーブルの短辺に雨森が座り、左右に沙月と絵麻が位置していた。千里は奥の端、江角の向かい側だった。新しいテーブルでも、まず雨森が席に着き、沙月と絵麻が先ほどと同じ位置関係に座った。残る千里が、雨森の向かいに腰掛ける。

雨森勇太。

諏訪沙月。

花田千里。

そして自分、高原絵麻。

この保養所に潜入したときには、十人の仲間がいた。それが今や四人だ。なぜこんなことになってしまったのか、理解できているわけではない。しかし現実には、ここには四人しかいない。

いったん座った雨森が、また立ち上がった。何も言わずにキツチ

ンに向かう。どうしたのだろうかと思っていたら、缶ビールを四本抱えて戻ってきた。

「飲まないんじゃないの？」千里が目丸くする。「酔った勢いで、誰かに疑いが集中する危険があるって」

「酔うほど飲まないだろう」

雨森が素っ気なく答えて、缶ビールを配った。確かに、想像を超える展開に、身体が緊張している。喉がからからだ。開栓して、ひと口飲む。冷たい炭酸が喉に染みた。

酔うかどうかは別として、絵麻には気になることがあった。雨森の変化だ。あれだけ単独行動を避けていた雨森が、二度も単独行動した。ガムテープを取ってきたときと、缶ビールを取ってきたとき。しかも、事前に自分の行動を宣言していない。

ビールを飲んだこともそうだ。千里が指摘したとおり、ビールを飲むことに反対したのは、雨森自身だ。それなのに自らビールを取ってきた。彼もまた、亜麻音の凶行に神経をやられて、身体がアルコールを欲したのだろうか——それとも？

雨森もビールを飲んで、缶をテーブルに置いた。

「江角さんまで死んでしまった」

そう切り出した。

「あの調子だと、亜麻音さんも復讐ふくしゅうの役には立たないだろう。とす

ると、残ったこの四人で復讐を成し遂げなければならぬ」

雨森は、ゆっくりと残った仲間たちを見回した。覚悟はあるのか、と問うている目だ。

沙月が息を吐いた。

「仕方ないね。これだけしかないんだから」

「まあ、もつとも」雨森も苦笑に近い表情になる。「中道殺しは、昨日までの計画だと、最低二人は必要だ。中道の車を、二台の車で挟むんだからね。でも西山殺しは、一人でも実行できる。だから最少催行人数は、三人ということになるね。だから犯人が復讐を止めたのなら、あと二人殺せばいい」

沙月に負けず劣らず、悪趣味な科白だ——そう思いかけたけれど、ひっかかるものがあつた。

「それって」思わず言った。「犯人は、まだ生きてるってこと？」

犯人は江角ではないのか。そういう問いかけだ。

しかし雨森は小さく首を振った。「まだ、わからない。一橋さんが殺されたときから、ずっと言っていることだ。僕たちには、犯人を特定する手段がない」

「そうだね」千里も同意する。「誰にでも、できた。いつだって、そんな結論だった」

「江角さんじゃないの？」沙月が不満そうに唇を尖らせた。「あの

「うろたえ方は、犯人としか思えないんだけど」

「そうかもしれない」雨森が曖昧あいまいに答えた。「沙月さんの説は、説得力があった。その可能性は十分あると思うよ。ただ——」

雨森は先ほどまで使っていたテーブルに視線を向けた。すぐ傍には、江角が骸むくろになって横たわっている。

「あの反応だけで犯人と決めつけるのは、数多あまたある冤罪事件と同じだと思う。予想外の指摘に動揺した人間を、犯人に仕立て上げるのは危険だ。でも——」

雨森はここで唇を歪ゆがめた。「江角さんはもう死んでいる。冤罪だったとしても、本人に迷惑はかからないけど」

ものすごい意見だ。適当なコメントを思いつかないでいるうちに、雨森が表情を戻した。

「冤罪だった場合に被害を被るのは、むしろ僕たちだ。犯人の目的が復讐の妨害だったら、まだ僕たちは犯人に狙われていることになるからだ。だから自衛のためにも、事件について考え続けなければならぬ」

「堂々巡りじゃんか」沙月が放り出すように言った。「考えなきやいけない。考えるネタがない。誰にもできた。ずっとその繰り返し。そうやって同じところをぐるぐる回っているうちに、もう五人も殺されたんじゃない」

「だって、本当にそうだったからな」

身も蓋もない返事に、沙月がのけぞる。雨森は「まあまあ」というふうに片手を上下させた。

「そのとおりんだけど、かといって放置するわけにはいかない。警察のような細かい捜査ができないんだから、逆に僕たちはもっと大きい視点に立てばいい。事件全体を俯瞰した『絵』を描くこと。あるいは、事件の枠組みを見つけ出すこと。これは証拠がどうこうじゃなくて、想像力が重要になってくる」

「想像力」沙月が繰り返す。「つまり、当てずっぽうということね」「そのとおり」雨森があっさりと認めた。「論理的に考えることもできない。亜麻音さんに殺された江角さんは別として、他の四人を殺したのが同一人物なのかどうかもわからない。単独犯なのかかわからない。考えるだけなら、どうとでも考えられてしまう。極端な話をすれば、中道や西山が忍び込んできて殺したって可能性すら、僕たちは否定できないんだから。だったら、納得できる絵を描く。それしかないと思う」

絵麻は唾を飲み込んだ。雨森がわざわざそういう以上、彼には描いた絵が見えているのだ。

「それで」絵麻はそつと言った。「雨森さんは、どんな絵を描いたの？」

「うーん」雨森は難しい顔をした。「正確に言えば、絵を描いたのは僕じゃない。吉崎さんだ」

「吉崎さん？」

女性三人が同時に復唱した。同じ夜に殺された菊野きくのはともかく、吉崎が殺された後に、瞳ひよみが殺されているではないか。絵麻がそう指摘すると、反応したのは雨森でなく千里だった。

「なるほど。一橋さんだね」

「そう」雨森が満足そうにうなづく。「一橋さんが殺されたときの話だ。一橋さんのとき、吉崎さんが唱えた説を憶えてる？」

「えっと」必死に記憶を辿るたど。「犯人は、標的を四人と考えていた。三人プラス一橋さん。だから犯人にとっては、あくまで復讐の一環なんだと……」

「一橋さんは、仲間じゃないとも言ってたよね」千里が苦虫を噛み潰つぶしたような顔で続けた。「一橋さんはフウジンブレードの元社員。」

敵側の人間だから、復讐の対象なんだと」

「そのこと」雨森は真面目な顔で千里を見た。「僕は、吉崎さんの説に、説得力を感じた。説得されてしまったといってもいい。解散した後一人でじっくりと考えてみたけど、あれを否定することもできなかったし、あれ以上の仮説を思いつくこともできなかった。だから、ひとまず吉崎さんの説が正解だと結論づけることにした」

千里が眉間のしわを大きくした。「一橋さんは、敵だと？」

「犯人がそう考えたということだよ」雨森が棘のある言葉を平然と受けた。「今必要なのは、みんなの共通認識じゃない。犯人の意識だ。昨日の午後、一橋さんを殺した犯人は、一橋さんを復讐の対象としていた。そういうことだ。僕たちの認識は問題にしていない」

雨森の説明に正しさを認めたのか、千里はそれ以上反論しなかった。しかし眉間のしわは消えていない。

雨森が説明を再開した。

「犯人は、一橋さんを復讐対象、つまりフウジンブレード側の人間と考えた。僕たちは——手伝ってくれた吉崎さんや亜麻音さんを含めて——フウジンブレードに攻撃を加えるのが目的だったわけだから、一橋さんがフウジンブレード側の人間なら復讐対象になり得る。つまり、全員が一橋さん殺しの容疑者になり得るわけだ」

「また、それ？」

沙月が呆れたようにコメントした。雨森は、そんな沙月に笑ってみせた。

「それが吉崎さんの結論だった。でも、僕はここに引っかかった。

一橋さんの境遇を思い出してくれ。一橋さんはフウジンWP1の開発者だ。開発の途上で製品の欠陥を内部告発した結果、会社を追われることになった。社内にながら会社を敵に回した人間を、フウ

ジンプレード側の人間だと思えるかな」

「えっ」予想外の指摘に、千里が戸惑った声を上げる。「どうだろう」

「思ったんじゃないの？」沙月が面倒くさそうに言った。「一橋さんは、現実に殺されてるんだから。吉崎さんの説が正しいのなら、少なくとも誰か一人は、そう考えたってことでしょ」

「少なくとも誰か一人は、そう考えた」雨森が繰り返した。「僕も、そう思う。ここで考えなければならぬのは、誰ならそう考えるだろうということだ。本当に、全員が同じように、一橋さんを敵と考えられたんだろうか。会社を追われた一橋さんは、フウジンブレードの敵だ。僕たちは、だからこそ彼を仲間に迎え入れたんだ。それなのに、なぜ犯人は敵と考えたのか。僕たちと合流してからは、一橋さんは大活躍だったのに。彼がいなければ、復讐計画は立てられなかったのに」

雨森は女性三人を見回した。

「一橋さんを敵と考えられるのは、他にない特殊な事情があるんじゃないか。僕はそう考えた」

千里が缶ビールを飲み干した。空き缶をテーブルに置く。かん、という軽い音が食堂に響いた。

「特殊な事情」雨森を上目遣いに見つめる。「なんなの？」

「僕自身の心を探ったら、わかった」

雨森は、そう答えた。

「一橋さんはフウジンブレードの社内にながら、正義を貫き通しつらぬのために会社を去った。典型的な正義の味方なのに、敵と思える属性せいを、僕はひとつだけ思いついた」

雨森がこちらを見た。後は任せたという視線だ。いきなり振られあじても困る。こちらは、まだ五里霧中ごりむちゆうなのだ。

「えっと」考えながら話す。「一橋さんは、フウジンWP1の開発ふえきをしていて、低周波振動のリスクに気づいたから、上司だった笛木ふえきに意見したんだよね」

「そうだね」雨森が相づちを打つ。その顔を見るかぎり、的外れなまとはずことを言ったわけではなさそうだ。少し安心して、先を続ける。

「それが原因で開発を外されて、閑職かんしやくに回された。その結果、一橋さんは会社を辞めることになった。それだけなら、一橋さんをフウジンブレード側と見なすのは難しいね」

「難しい」雨森が繰り返す。「でも、ここで考えなければならない。いくらフウジンブレードがブラック企業で、下の人間の意見が通りにくかったとしても、意見を言って即左遷となるだろうか。そんなことをしていたら、開発者はあつという間に全員いなくなってしまう。欠陥品とはいえ、まがりなりにもフウジンWP1は完成してい

るんだ。意見交換なしで完成まで持っていけるものか。一橋さんが開発を外されたのは、彼の意見が会社に大きなダメージを与えるものだったからだ。一橋さんの話を思い出してほしい。一橋さんはどんな具申ぐしんをしたのか」

雨森は、今度は千里を見た。千里は一度大きく深呼吸してから、答えた。

「発売時期を遅らせてでも、検証すべきだ……」

「そう」雨森も悲しそうな顔をした。「僕が注目したのが、ここだ。発売時期を遅らせてでも。つまり一橋さんは、フウジンWP1の発売間際まで開発に従事していたことになる。使うと低周波振動を起こし、周囲の人間に害を与える欠陥品の開発に。だったら、その欠陥品ができあがったのは、誰のせいということになる？」

「一橋さん……」

千里が呻くように言った。ぶんぶんと頭を振る。

「そういうことなの？ 一橋さんはフウジンWP1を開発したから殺されたっていうの？ 欠陥を直したくても、その機会を与えられなかったのに」

「開発の初期段階で、問題に気づいて解決しなかったともいえる」

雨森が、あえて冷たい口調で答えた。「犯人はそう考えたんじゃないのかな。もし一橋さんがフウジンWP1を開発したことが原因で

殺されたのなら、仲間うちで誰が一橋さんに恨みを持つだろうか。簡単なことだ。フウジンWP1の被害に遭った人間だ」

背筋に悪寒が走った。フウジンWP1の被害に遭った人間には、自分も含まれるからだ。横目で沙月を見る。沙月もまた、はつきりとわかるくらい青ざめていた。雨森は絵麻と沙月を等分に見て、続けた。

「訴訟の原告と言い換えることもできるね。僕。絵麻さん。沙月さん。江角さんの四人だ」

その場の全員がお互いの顔を見た。雨森が容疑者とした四人のうち、三人までがここにいる。

雨森が困った顔をした。

「じゃあ、四人のうちの誰か。僕は自分を外させてもらった。だって、犯人じゃないことは自分がいちばん知ってるから」

「ずるいね」

沙月が険しい表情でコメントした。「できれば、客観的に無実を証明してほしいんだけど」

「しないよ」すがすがしいほどきつぱりと、雨森が答えた。「僕が怪しいのなら、それを証明するのは、君たちの仕事だよ」

沙月は、はつきりと洗面を作った。「ひどい人」

雨森が顔の前で手刀を立てた。謝るときの仕草だ。

「いや、僕自身を容疑から外す理屈は、あるにはあるんだ。でも自分で言っちゃうと、結局、客観性はなくなるからね」

「わかったから、言つてよ」千里が頬を膨らませる。「雨森さんの考えだと、わたし以外の誰かなんでしょ」

「うん」これまた、はつきりと認めた。「僕たち四人ならば、吉崎さんが指摘したように、一橋さんを敵と見なすことができる。なんといつても、彼は直接的な加害者だからね。しかも、フウジンWP1の被害に遭っていない他の仲間が同意すれば、裏切ったことにならない。復讐の妨害ではなく、復讐の一貫としての殺害だと、みんなが理解してくれば。吉崎さんが真っ先に理解を示した。一橋さんをフウジンブレード側と認識して殺したのなら、犯人捜しをする必要はないと、吉崎さんは宣言した」

昨晩のことを思い出す。確かに、吉崎の意見はそのようなものだった。

雨森は千里に顔を向けて続けた。

「これって、犯人にとっては何ものすごく魅力的な意見じゃないか？ だって、仲間殺しが不問になるんだよ。そもそも最初から一橋さんを敵と見なしたから殺したんであって、決して復讐の妨害をするつもりだったわけじゃない。犯人には、裏切ったつもりはないんだろう。だから笛木ふえきを殺したし、中道や西山を殺す気も満々だった。吉

崎さんは、犯人の意図を正確に理解していた。だったら、吉崎さんの提案に乗っからない手はない。犯人捜しをやめて復讐に専念するという意見に、賛成すればいいだけだ。事実、あのときは賛成が大勢を占めた。でも、その中で反対した人間がいたのを、覚えてる？」

「憶えてるよ」千里が即答した。「雨森さんと、絵麻さん」

雨森が笑みを作った。

「ありがとう。犯人からすれば、反対することにメリットはない。自分から、わざわざ蒸し返そうっていうんだから。だから、あのとき反対した僕と絵麻さんは、犯人じゃない」

ふっと肩から力が抜けた。自分が犯人ではないといわれたからだ。同時に、雨森が自身が犯人でない理屈もあると言った意味も理解していた。みんな、吉崎の仮説を支持した。沙月も、江角も。彼らは一橋を敵の一味と考えることに賛成したのだ。しかし、自分と雨森だけは、一橋は味方だと言い切った。自分は先ほどまでの仲間を敵と認定することに抵抗があっただけなのだけれど、結果的にそれが自分を護ったことになる。

「だから、残るは沙月さんと江角さんということになる。そこまでは、すぐに思いついたんだ。でも二人のうち、どちらかがわからなかった。江角さんは死んでいて沙月さんは生きてるけど、それは理

由にならない。一橋さんが殺された時点では江角さんもびんぴんしてたわけだし、江角さんを殺したのは亜麻音さんなんだから」

一足飛びに犯人扱いされなくて、沙月は不安の中で安心するとうう、奇妙な表情になった。

「昨日から今までずると引つ張ったのは、二人のうちどちらなのか、わからなかったからだ。このまま時間切れかと諦めかけたんだけど、ついさつき、突破口が見つかった」

沙月と千里が、同時に目を見開いた。自分も同じような顔をしていたかもしれない。六つの大きな目が、雨森を捉えた。

女性たちの視線を受けた雨森は、真剣な顔になった。しかし誰の目も見ずに話を続ける。

「江角さんだ。犯人捜しをしていたときに、江角さんは『一橋さんは笛木の関係者であり、瞳さんは西山の関係者だった。もう一人、中道の関係者がいても不思議はない』と言った」

そういえば、そんなことを言っていた気がする。

「そうしたら、千里さんが嘔みついた。一橋さんはフウジンブレードと敵対してたじゃないかと。江角さんは慌てた様子もなく、千里さんの意見に同意した。一橋さんが敵側なんて、まったく考えていないと」

雨森はまだ誰の目も見えていない。

「おかしいじゃないか。一橋さんが死んだ夜には、江角さんは吉崎さんの説に賛成していた。犯人は一橋さんが敵側だから殺したのであり、だから犯人捜しをして罰を与える必要はないという説。つまり、あの時点では一橋さんを敵呼ばわりしたわけだ。それなのに、今日になったら一橋さんは敵ではないという。これは、いったいどういうことなんだろうか。本音では一橋さんは敵と考えていたけど、千里さんを怒らせる必要はないと考えて、心にもないことを言ったのか。それとも確固たる意見を持たず、その場その場で適当なことを言っていただけなのか。あるいは——」

雨森は、ここで一人に視線を固定した。

「昨晩は仲間たちの団結が最重要と考えて、吉崎さんに賛成してみたのか。復讐を優先させるために。でも内心では、一橋さんを敵とは考えていなかった」

空気が固まった。

雨森は江角の矛盾むじゆんした発言に、三つの解釈を与えた。最初の解釈なら、未だに容疑者は絞しぼれない。二番目の解釈でも同じだ。しかし最後の解釈が正しければ、本気で一橋のことを敵と考えていたのは、沙月だけになる。

雨森は固定した視線の先に語りかけた。

「沙月さん、どう思うっ？」

沙月は目を合わせなかった。テーブルに置かれた缶ビールを見つめていた。

「わたしが、犯人だつて言いたいのか？」

顔を上げる。

「わたしが仲間たちを次々と殺していったっていうの？ 一橋さんだけじゃない。吉崎さんや菊野さん、瞳さんまで」

テーブルの上で手を組み合わせている。よほどの力が入っているのか、その手が白くなっていた。

しかし雨森はむしろ肩から力を抜いていた。「いや」

また沙月が目を見開く。反応に困ったのか、言葉が出てこない。

千里も同様だ。雨森はきちんと説明してくれるつもりのようなようだった。なで肩のまま話を続ける。

「一橋さんが死んだ夜、沙月さんは絵麻さんを誘って一緒に飲んだらどう？ 今から殺人を行おうという人間は、そんなことをしない。絵麻さんがどんな行動を取るかわからないからだ。一晩中居座られたら、殺しに行けない。事実、沙月さんの方が先に眠ってしまったと聞いている。だから、沙月さんは吉崎さん以降の犯人じゃない。一橋さん殺しについては沙月さんが犯人だと思うけど、君が殺したのは一橋さん一人だと思っている」

「……………」

沙月は口を半開きにした。一橋殺しの犯人だと告発されたことよりも、吉崎たちを殺した犯人ではないと言われたことに驚いているようだった。かまわず雨森は続ける。

「同じ理屈で、誘いに乗った絵麻さんも犯人ではない。つまり吉崎さんたちを殺したのは、千里さん、江角さん、亜麻音さんの三人が候補者となる」

今度は千里が身を固くした。

「では、三人のうちの誰か。まず考えなければならないのは、犯人は一人なのか、複数なのかという点だ。吉崎さんと菊野さんは、ひと晩のうちに殺された。一人が二人を殺したのか、それとも二人がバラバラに殺したのか。僕は一人だと思っている。なぜなら、ペテインナイフが同じものだったからだ。二人が別々に凶器を選んだら、たまたま同じものだったというのは、あまりにできすぎだ。一人の犯人が使いやすい凶器を選んだと考えた方がいい」

「共犯ってことはないの？」ようやく自分を取り戻したのか、沙月が問いかけた。「たとえば千里さんと江角さんが共犯で、手分けして殺したってこともあり得るんじゃない。それなら、凶器が同じでも説明がつく」

「説明はつくね」雨森はそう答えた。「でも、僕はその説は採らなかつた。さつきも言ったとおり、僕たちが事件の真相を知るためには、

事件全体の絵を描くことが重要だと思ったからだ。僕の描いた絵は、複数犯だと破綻するものだったからだ」

普通に考えれば、説明になっていない。けれど今はそれを否定するのではなく、雨森の絵を見る必要がある。そう思った。沙月も同じように考えたのか、それ以上は追及しなかった。雨森は話を続ける。

「亜麻音さんは違うと思う。吉崎さんと深い関係があったからじゃない。だからこそ殺意が湧くともいえるからね。でも、江角さんを殺したときの亜麻音さんは、常軌を逸していた。それまでの、みんなが部屋に引っ込んだタイミングを狙ってこっそり殺した行動と、明らかに毛色が違う。江角さん殺しは、やはり江角さんが吉崎さんを殺したと思ひ込んだことによる、復讐だと思う。彼女は、犯人じゃない」

長テールの方を見た。江角の死体の隣で、亜麻音が気を失っている。殺人を犯しているのに疑いが晴れたというのは妙な表現ではある。どちらにせよ、彼女は喜んだりしないだろう。

「沙月さんは、江角さん犯人説を唱えた。隣の部屋に音を聞かれなために、自分の隣室から襲ったという意見には、確かに説得力があった。では、それが答なんだろうか」

「違うの?」

不服そうに沙月が言った。もし沙月が一橋殺しの犯人であり、それ以外は無実だったのなら、沙月の江角犯人説は、純粹に思考の結果から生まれたことになる。その分公平だし、だからこそ説得力を持つている。

「うん」雨森はあつさり肯定した。「そう思ってる」

「どうして？」

「瞳さんだ」雨森はそう答えた。「吉崎さんや菊野さんのときはわからなかった。でも、瞳さんは昼間に殺されている。僕はここに注目した」

「ここって」雨森の真意がわからない。「どこに？」

「瞳さんは、午後二時過ぎに部屋に戻った」

雨森はゆっくりと言った。「江角さんは、朝方煙草を吸っていた。ドアを開けた途端に煙の匂いが漂ってきたくらいだから、髪にも服にも煙草の臭いがついただろう。もちろん、口臭も煙草臭い。一方、犯人は少なくとも瞳さんは殺す気だった。保養所の中にいる人間を殺そうとしたら、基本的に客室で実行することになるだろう。とすると、犯行に使う部屋には、煙草の臭いが残ることになる。もし江角さんが犯人なら、現場の部屋に入った時点で犯人がわかってしまう。でも、そんなことはなかった」

「えっ」千里が言葉に詰まった。「でも……」

「大切なのは、菊野さんの部屋に煙草の臭いが残っていたかどうかじゃない」千里の抗議を無視して、雨森が言った。

「江角さんが犯人なら、今からさらに殺人を犯そうというのに、証拠になり得る煙草を吸うかということだ。あの人は、そんなバカじゃないぞ」

江角が容疑者から消えた。残るは、一人だけだ。

千里の顔から、表情が消えていた。ただ、正面にいる雨森の顔を見つめている。雨森は、その視線を受けた。たっぷり十秒間は見つめ合った後、雨森は視線を逸らした。下を向いたのだ。

「僕たちは復讐者だ」

そんなことを言った。

「僕たちは、フウジンブレードを憎んだ。フウジンWP1の裁判はうまく進まない。司法が当てにならないなら、自分で解決してやる。そう思い詰めるほどに。吉崎さんと亜麻音さんが現れて、それは現実味を帯びた」

テーブルの缶ビールを取って、残りを飲み干した。そっと、テーブルに戻す。

「吉崎さんが一橋さんを連れてきて、復讐は僕たちの手の届くところに下りてきた。そして僕たちは計画を練り、実行に移した」

雨森は顔を上げた。三人の女性を等分に見る。

「復讐計画を練っているときにずっと僕たちの頭を支配していたのは、フウジンブレードへの憎しみだ。標的にした三人を敵と呼んで、殺意をみなぎらせた。そう、奴らは敵なんだ」

雨森はいったん言葉を切り、少し困った顔になった。

「これが復讐者の特徴なのかもしれない。復讐の対象を敵と捉え、一緒に復讐するメンバーを味方と認識する。敵と味方の構図をはっきりさせる心理的傾向が生まれた。実際、この保養所に来てから、僕たちは敵とか味方とか、何回口にしただろう。そして、敵と味方が存在するから、裏切り者という言葉も登場する。そう。僕たちはすべてを敵と味方に色分けしてしまう。ここで一橋さんに戻ろう」

千里の肩が震えた。

「吉崎さんは、犯人が一橋さんを敵と捉えたことを容認した。容認した上で、復讐の障害にならないのなら放っておこうとした。つまり吉崎さんは、復讐のために一橋さんを敵と見なし、犯人を味方とする決断をした。それに反対したのが、千里さんだ」

反射的に千里を見る。沙月もだ。千里はまだ無表情のままだ。ただ、雨森を見つめている。

「千里さんは、一橋さんに思い入れがあった。同じフウジンブレードに勤務していて、過労死した弟さんを重ね合わせたのか。あるいは恋愛関係にあったのか。それはわからないけれど、千里さんは一

橋さんを敵とはどうしても思えなかった。千里さん自身はフウジン WP1とは何の関係もないから、一橋さんを恨みようがないし。自分は一橋さんの味方なのに、みんなが一橋さんを敵にってしまった。だったら、みんなは自分の敵だ。復讐者である千里さんは、そう考えた。ずっと復讐の対象を敵と考えていたんだ。ここにきて自分の敵に回った人間は、一橋さんの復讐の対象でしかない。殺さない理由はない。一橋さんを味方と明言した、僕と絵麻さんを除いて」

ぶん、と音を立てて沙月がこちらを見た。自分もだ。今、千里の左側には味方の自分が、右側には敵の沙月がいる。

「ここで、さっきの共犯説に戻ろう。千里さんの味方は僕と絵麻さん。僕たち二人なら手伝える。でも、くどいようだけど、僕は犯人じゃない。絵麻さんは、吉崎さんと菊野さんが殺された夜は、沙月さんと一緒にいた。だから絵麻さんも手伝えない。千里さんの単独犯ということになる」

雨森が説明を終えると、沈黙が落ちた。誰もが身動きひとつせず、に黙り込んでいる。

一橋を殺したのは、沙月。

吉崎と菊野、そして瞳を殺したのは、千里。

それ自体は、特に驚くべくことではない。みんな復讐者なのであり、笛木殺害に立ち会ったからだ。それはわかる。二人が殺人を犯

動したと聞かされても、動揺はない。

それでも、二人が手にかけてのが仲間だという事実は、やはり重かった。彼女らにとっては、殺害対象は仲間ではない。味方じゃなく、敵だ。でも、自分にとっては、どちらも味方なのだ。

復讐者は、何でも敵と味方に分けたがる。

雨森の言ったとおりだ。だからこそ、困っている。そう、今の自分を支配しているのは、困惑だ。怒りでも恐怖でも動揺でもなく、困惑。困っているからこそ、次の行動に出られない。

ふうっと沙月が息を吐いた。「千里さん、だったの」

千里が、ようやく表情を動かした。わずかに笑ったのだ。「沙月さん、だったの」

「まあね」沙月も笑った。「フウジンWP1。わたしはあれに人生をめちゃくちゃにされたんだよ。あんなのを作っておいて、よく味方でございますって、わたしたちの前に出られたもんだよ」

「まあ、そうだよね」千里がうなずく。「沙月さんたちの立場からすれば、そうか。それは仕方ない。でも、わたしにはわたしの立場があるから」

千里はバーカーのポケットに手を入れた。抜き出した次の瞬間、千里の右手が大きく振られた。右手は右隣の沙月の首筋をかすめて止まった。その手には、ペティナイフが握られていた。

次の瞬間、沙月の首から棒のような血が噴き出した。千里がわずかに首を傾けると、血は空いたスペースを飛び、床を汚した。千里は、返り血を浴びるようなみつともない真似はしなかった。

沙月が目を見開いた。自分に何が起こったのか、理解できていない顔。血を噴き出した反動で、右側に倒れていく。頭部をかばう仕草すら見せなかった。鈍い音がして、側頭部を床に打ち付ける。沙月は二、三度痙攣して、動かなくなった。

「沙月さん、バカだね」千里は冷たく吐き捨てた。「雨森さんが言ったじゃない。復讐の最少催行人数は三人だって。ここにいるのは四人。つまり、あと一人は殺せるって、気づかなかったの？」

顔を上げる。雨森と絵麻を見た。

「終わったよ——いや、まだか」

きびすを返して長テーブルの方に向かう。足元にはまだ意識を回復していない亜麻音が倒れている。千里はしゃがみ込むと、亜麻音の身体を仰向けあおむに戻した。またがる。ペティナイフを亜麻音の心臓に当てた。体重をかけて押し込む。

びくり、と亜麻音の身体が跳ねた。動きはそれだけだった。亜麻音もまた、死んだのだ。

千里は立ち上がった。ナイフは亜麻音の心臓に残したままだ。手ぶらで戻ってくる。

「今度こそ、終わった」

「そうか」

まるで何事もなかったかのように、雨森が答えた。千里は薄く笑った。

「邪魔、しなかったんだね」

「そうだな」雨森が腕組みした。「復讐の最少催行人数は三人。沙月さんと千里さんのどっちが死んでも、復讐はできる。だから、放っておくことにしたんだ。武器を隠し持っているのは千里さんの方だから、生き残るのは千里さんだと思ってたけど、やっぱりそうなたか」

「今までどおり宙ぶらりんのままにして、四人で復讐するって選択せんたく肢しはなかったの？」

「なかった」雨森は即答した。「これだけ人数が絞られたんだから、疑心暗鬼が募るだけだ。復讐の前に暴発する可能性の方が高いと思っただった。だったら真相を明らかにして、決着をつけてもらった方がいい」

「結局、雨森さんの狙いどおりだったってことだね」

「うん。僕からも質問させてもらっていい？」

「何？」

「殺す順番の話。吉崎さんと菊野さんから殺したのは、やっぱり腕

力？」

「そう」千里は右肘を折り曲げて、力こぶを作るポーズを作った。

「沙月さんは押し倒すなんて下品なことを言ってたけど、やっぱり男の人の腕力は怖いからね。吉崎さんも菊野さんも、力が強そうだったし。警戒されたら殺せなくなると思った。だから、無警戒のうち

ちに殺したんだ」

「あんまり言いたくないけど、色仕掛け？」

「当然」千里が屈託なく笑った。「ノックして『怖い』って言ったから、あっさり入れてくれたよ。ベッドに寝転んだら覆い被さってきおほたから、首に両手を回すふりして刺すのは、簡単だったよ。吉崎さんも菊野さんも、まったく同じ行動を取るんだから、おかしくって」

千里は、自分の犯罪についてべらべら喋っている。雨森が指摘したように、雨森と自分は味方だから、気を許しているのだろうか。

雨森が苦笑した。「僕も同じ状況に置かれたら、同じ行動を取ったかもしれないな。そうか。部屋に髪の毛が落ちてないか気にしてたのは、逆に髪の毛を残さなかった自信があったからか」

千里は目を細めた。

「ベッドに寝転んじやったからね。その程度は気にするよ」

音は気にしなかったの？ 沙月さんは音を理由に江角さん犯人説

を唱えてたけど」

「実は、まったく気にしなかった」千里はおどけて言った。「だって、江角さんがあのときの声が聞こえたなんて言ったのは、わたしが二人殺した後だよ。先に言えって感じ。でも江角さんは両隣から怪しい声が聞こえたって話をしなかったから、安心したんだけど」

「その江角さんは、どうするつもりだったの？」

「それが困っちゃってさ」

実際に千里が困った顔をする。とても殺人の話をしているとは思えない口調。千里も千里なら、雨森も雨森だ。

「歳はくってても、やっぱり男の人だし。吉崎さんと菊野さんを殺した後、江角さんの部屋もノックしたんだけど、寝ちゃったみたいで返事がなかったんだ。だから、昨夜のうちには殺せなかった。今日しかなかったんだけど、あの人の部屋ってば、煙草臭いでしょ。中に入って煙草の臭いが移るのがいやだった。シャワーを浴びて着替えても、服を替えたことで怪しまれる危険がある。どうしようかと思っただら、今度は江角さんが一橋さんが敵じゃないって言いだした。殺すべきかどうかと迷っていたら、亜麻音さんが江角さんを殺しちゃったんだ」

そういえば、あのとき千里は戸惑っていた。あれは、江角が敵だという判断が揺らいだからだったのか。

「まあ、結果オーライってことで。それから、瞳さんはみんなが話してたとおり」

「それなんだけど」雨森が千里の血まみれの顔を覗きこんだ。「どう思う？ 瞳さんは、やっぱり西山のスパイだったのか。それとも本当に夫を殺したくて仲間に入ったのか」

「本当に殺したかったんだと思う」それが千里の答だった。「打ち合わせしてたときの、西山に対する憎しみが演技だとは思えない。わたしたちの復讐計画に便乗したちやっかりさんだったとしても、スパイとかじゃないよ」

「そうか」

おそらく、雨森の考えと同じだったのだろう。納得顔だった。

千里が笑みを消した。「わたしからも訊かせてほしいな」

「何？」

「雨森さんは、一橋さんを恨まなかったの？ 雨森さんの健康を奪い、彼女の命を奪ったのは、一橋さんが作った機械だよ」

「うーん」雨森は腕組みしたまま唸った。「あまり考えなかったな。どちらかといえば、販売を止めようとしてくれた印象しかなかった。実は、一橋さんが完成までこぎつけたことに思い至ったのは、ついさっきだね。間抜けな話だ。僕も沙月さんくらい頭が回ったら、沙月さんより先に手を出してたかもしれない」

本気か冗談かわからない口調だった。千里もコメントに困ったような顔になる。その複雑な表情を、今度はこちらに向けてきた。

「絵麻さんは？」

「わたしも、恨みはしなかった」自分は本音で答えた。「一橋さんも被害者だと思ってたから」

「そう」

千里が安堵の息を吐いた。もう、これ以上殺さなくていいんだと実感したように。あらためて椅子に座る。

雨森がキッチンに歩いていった。戻ってきたときには、缶ビールを三本手にしていた。「ほら」

一本ずつ渡してくれる。千里が真っ先に開栓して、喉に流し込む。

「ふうっ」

サラリーマンの仕事帰りの一杯のような反応だ。事実、彼女にとつては仕事を終えたのだ。一橋の復讐という仕事を。

「復讐か」千里がぼつりと言った。「復讐って、本当に危ういよね。自分では肚はらが据すわっているつもりでも、傍はたから見たら、めちゃくちゃ危なっかしいんだろ？。まるで、崖の上で踊ってるみたいに。一歩足を踏み外せば、崖下に転落してしまう。それでもみんな、復讐という踊りをやめようとしなかった。そうしているうちに、次々と崖から落ちていった。まあ、わたしが突き落としたんだけど」

小さく笑う。顔を上げた。

「でも、わたしはまだ踊るのをやめないよ。明日の朝、中道と西山を殺すまでは、絶対に。雨森さんと絵麻さんは、どうする？」

「やめないよ」雨森はきっぱりと言った。「あの二人は、絶対に地獄に送る」

「わたしも」絵麻は下腹に力を込めた。「その意味では、わたしたちは味方だね」

「違くない」雨森が缶ビールのプルタブを開けた。絵麻ももらったビールを手取る。

「じゃあ、明日の成功を祈って」

三人で缶ビールを触れ合わせた。

千里は残っていたビールを飲み干した。空き缶をテーブルに置いて、壁の掛け時計を見る。つられて見ると、午後六時を過ぎていた。

千里が絵麻たちに視線を戻した。「明日は早いから、もうご飯にしちゃおうか」

そして立ち上がる。

「手を、洗ってくるね」

* * *

午前五時。

夜が明けたばかりで、周囲に人気はない。それでも敷地の外に気をつけながら、車に灯油を積み込んだ。今から、フウジンブレード本社に行くのだ。

雨森は千里を見た。「本当に、いいの？」

「いいよ」寒いのか、千里は両手をこすり合わせながら答える。

「西山殺しは、一人でやんなきゃいけない。二人とも、まだ誰も殺してないでしょ。ここは、ベテランのお姉さんに任せなさい」

昨晚の打ち合わせで、中道担当は雨森と絵麻、西山担当は千里と決まった。中道は、乗ってきた車を左右から社有車で挟んで出られなくして、流し込んだ灯油で焼き殺す作戦だ。一方西山は、死体を見せて呆然ぼうぜんとしているところを襲うという算段。失敗のリスクは、

西山の方が高い。

「食堂におびき寄せれば、これだけ人が死んでるんだから、パニックに陥るでしょ。殺すのは問題なくできると思うんだけど……」

「だけども」

「やっぱり、瞳さんの死体を見せた方がいいのかな。その方がイン

パクトがあるでしょ」

瞳は西山の妻らしい。瞳が西山の意を受けて潜入していたのならもちろん、仮に関係が冷え切っていたとしても、妻の死体は確かにインパクトが大きい。雨森もうなずいた。

「じゃあ、瞳さんを一階に下ろそうか。玄関から入ってすぐなら、手間もかからない」

瞳の扱いはぞんざいだった。台車を二階に持って上がって、瞳を載せて階段まで運ぶ。階段から荷物のように落として、一階でまた台車に載せて玄関まで運んだ。

外の道から玄関の中は見えない。西山が玄関から中に入ってはじめて気づく場所に、瞳を横たえた。玄関脇には、観葉植物の大きい植木鉢がある。その陰に隠れて襲いかかれば、低リスクで殺害することができる。

「じゃあ、こいつは預かるね」

千里が笛木のスマートフォンを手を取った。「もうしばらくしたら、
笛木をかた騙って西山を呼び出すから」

雨森も笛木のIDカードを目の高さにかざす。

「僕たちはこれでフウジンブレード本社に侵入して、社有車の鍵を失敬する」

雨森と二人で車に乗り込む。運転するのは雨森だ。

「じゃあ、ちょっと行ってくるよ。終わったら戻ってくる。そうしたら、一緒にここの後始末をしよう」

「うん。待ってる」

雨森が車をそろりと発進させた。千里が手を振って見送ってくれた。

「まあ、千里さんなら任せて大丈夫だろう」

車を運転しながら、雨森が言った。こと殺人に関しては、千里を信頼しているようだ。

「それって、千里さんが味方だから？」

「うん」前方に視線を固定して、雨森が答える。「少なくとも中道と西山を殺すまでは、味方だ。それは間違いない」

奇妙な条件付きの信頼だ。絵麻がその点を質すと、雨森は唇を歪めた。

「警察は無能じゃない。保養所に火を放ったとしても、死体は全員殺された後に焼かれたことを見抜くだろう。じゃあ犯人は誰だという話になる」

ぞくりとした。雨森の口調は淡々としていたけれど、不吉な響きを伴っていたからだ。

「犯人が必要だったことだね」絵麻も正面を見ながら言った。「わたしか、雨森さんか、千里さん」

「そう」雨森は機械のように答えた。「できれば、誰かが他の全員を殺した挙げ句に、建物に火を放って自殺したという構図がありがたい。もちろん、僕はその役を担うつもりはない。絵麻さんにも、やらせる気はないよ」

「……千里さんに、責任を取ってもらおうの?」

「責任かどうかは、わからない」赤信号で停車して、雨森は絵麻を見た。

「千里さんは味方だ。一橋さんに関する立ち位置ではね。だからこうして共同作業をしている。でも僕にとっては、あの人が殺した面々も仲間だ。その意味では、千里さんは敵とも解釈できる」

「雨森さんにしては、ずいぶんと曖昧だね」

絵麻はコメントした。「結局、どっちなの? 千里さんは雨森さんにとって敵なの? 味方なの?」

「まだ決めかねている」雨森はそう答えた。「中道を殺して、戻ってから決める。今はまだ、そのことは考えないようにしよう。僕はまだ、崖の上で踊ってるんだ。余計なことを考えたら、崖下に落ちてしまう」

「それもそうか」絵麻もうなずく。

正直なところ、これだけの事件を起こしておいて、警察に逮捕されない自信は、まったくくない。元々復讐とは、逮捕のリスクと背中

合わせなのだ。というか、逮捕されてもいいくらいの覚悟がないと、復讐など達成できない。そう思っていた。おそらくは雨森も、同じ覚悟を持っているだろう。

それでも、千里にすべてをなすりつけて自分が逃げられるのなら、そうしたい。

そのようにも考えているはずだ。復讐達成を目の前にして、微妙に揺らいでいる。雨森だけではない。絵麻もだ。

いけない。雨森自身が言ったように、それでは崖から落ちてしま
う。

絵麻は雨森の腕をぼんと叩いた。

「やめないよ」

信号が青になった。雨森が車をそっと発進させる。雨森は、続きを促した。絵麻はすうつと息を吸って、最後まで喋った。

「踊りきるまで」

〈了〉